

2023(令和5)年の わが国周辺の漁海況の特徴について

目次

要約－2023年のポイント	1
1. わが国周辺の海況	4
2. 主要魚介類の水揚量・市況動向	8
3. 魚種別の漁海況・市況	
(1)マイワシ・さば類・マアジ	13
(2)サンマ	16
(3)カツオ・ビンナガ	18
(4)スルメイカ・アカイカ	20

2023年12月

一般社団法人 漁業情報サービスセンター
(JAFIC)

要約－2023年のポイント

● 総括

- ・黒潮大蛇行が継続するなか、北部太平洋や日本海の沖合を中心に高めの水温が続いた。
- ・サンマ、スルメイカ、カツオをはじめとして日本近海の主要魚介類の水揚量の減少傾向が長引く中で、カツオとビンナガは近年としては好漁となり、サンマは沿岸にも漁場が形成された。海洋熱波などの影響により太平洋側のマサバは不漁となり、さば類(全国)としては近年で最低の水揚量となった。スルメイカの水揚量は過去最低であったが、三陸海域では前年を上回った。水温の上昇傾向に伴い、マイワシなど主要魚種で分布の北上や南下時期の遅れが引き続き見られた。
- ・市況は、輸入水産物価格の上昇、燃油高および水揚量の減少などを反映して全般的に高めで推移し、特にスルメイカで顕著であった。

● わが国周辺の海況

- ・日本近海の海面水温は、北部太平洋や日本海の沖合を中心に近年(2011～2020年平均)より高めであった。一方、本州南方では季節風や台風の影響で低めの時期もあった。
- ・黒潮大蛇行は2023年も続き、黒潮続流も三陸沖まで北上が続いた。
- ・三陸沖は黒潮続流が北上して暖水が波及した影響で、海面水温は2023年を通して高めであった。
- ・親潮の勢力は、2023年を通して平年(1993～2017年の平均)より弱め～かなり弱めであった。
- ・道東～三陸沿岸はおおむね近年より高めであったが、親潮系冷水の南下により一部では低めの海域もみられた。
- ・対馬暖流の勢力は、おおむね平年より強めで、大和堆～佐渡沖で蛇行する流路を示すことが多かった。このため、蛇行が南下する山陰東部沖や能登半島～佐渡沖では、海面水温が近年より低めの海域がみられた。

● 主要魚介類の水揚量・市況動向

- ・全国主要117港における2022年12月～2023年11月の調査対象全魚種の累計水揚量は、前年同期比96%の177万2千トン、平均価格は前年同期比106%の253円/kgであった。
- ・魚種別の水揚量と平均価格の関係について、2021年12月～2022年11月と比較した結果、価格が上昇した魚種が多かった。産地市場で水揚量が伸び悩んだことに加え、ロシアのウクライナ侵攻の継続や円安の進行による輸入水産物の価格高騰、燃油価格の高騰などの影響が示唆される。
- ・魚価高の状況が続いている一方で、価格が徐々に前年並みに戻りつつある魚種もあり、今後の市況の動向を注視する必要がある。
- ・水産物輸出品のリーダである冷凍ほたての輸出は、中国が日本のALPS処理水を理由に輸入を停止した影響で、輸出量、金額ともそれぞれ前年の56%、63%に留まった。

● マイワシ

- ・マイワシの全国主要港における本年11月末現在の水揚量は60.5万トン(太平洋側53.3万トン、日本海側7.2万トン)で、前年(58.3万トン)を約2万トン上回った。
- ・太平洋側では道東のまき網が25.1万トンを漁獲し、前年の22.4万トンを上回った。
- ・日本海側では11月末までに約4.6万トンが境港に水揚げされたほか、隠岐海峡周辺で9月末～10月初旬に0歳魚の一時的な漁獲があった。

● さば類(マサバ、ゴマサバ)

- ・さば類の全国主要港における本年 11 月末現在の水揚量は 17.9 万トン(太平洋側 8.0 万トン、東シナ海・日本海側 9.9 万トン)で、不漁だった前年(20.7 万トン)を下回り、2019 年以降で最も少なかった。
- ・太平洋側では、海洋熱波などの影響により 2021 年から不漁が続いており、11 月末現在で魚群の本格的南下は見られていない。
- ・東シナ海・日本海側の水揚量は前年および過去 5 年平均並みであった。

● マアジ

- ・マアジの全国主要港における本年 11 月末現在の水揚量は 5.8 万トン(太平洋側 0.9 万トン、日本海側 4.9 万トン)で、前年(7.1 万トン)を下回った。
- ・日本海側では、7 月ごろから隠岐海峡周辺で漁場が形成され、境港における 7~9 月の水揚量は前年を上回ったが、10~11 月は前年を下回った。
- ・東シナ海側では、8~9 月は中南部海域・九州西沖海域中心に漁獲が続いたものの、1~11 月の累計水揚量は前年を下回った。

● サンマ

- ・今期の水揚量は、これまでの最低であった前年を上回ったが過去 3 番目に低かった。
- ・漁場は、前年よりも日本に近く、道東~三陸沿岸でも漁場形成があった。また、10~11 月にはオホーツク海にも漁場が形成された。
- ・魚体は漁期を通じて前年より小型で、平均価格も前年を下回る水準で推移した。

● カツオ

- ・竿釣りによる全国の 1~11 月の生鮮カツオの水揚量は約 3 万 4 千トンで、前年と過去 5 年平均を上回った。
- ・本年は黒潮続流が東北沿岸を北上したことでカツオ漁場が沿岸寄りに形成され、水揚量の増加に繋がった。まき網の漁獲量は前年を上回り、2021 年に次ぐ水揚量となった。
- ・竿釣りによる生鮮カツオの全国月平均価格は 300 円/kg 以上で期を通して高値で推移した。まき網による生鮮カツオも 319~527 円/kg の高値で推移した。

● ビンナガ

- ・全国の生鮮ビンナガの 1~11 月の水揚量は約 2 万 2 千トンで、不漁だった前年の 2 倍程度、好漁だった 2020 年の 60%であった。
- ・5 月中旬から近海竿釣り船によるビンナガ漁が本格化し、房総~東北海域に漁場が形成された。
- ・全国平均価格は 399~865 円/kg の高値で推移した。水揚量が多かったが、大きく値崩れすることはなかった。

● スルメイカ

- ・全国主要港における生鮮スルメイカの 1~11 月の累計水揚量は 1.1 万トンで、前年の 1.5 万トンを下回り、2019~2022 年平均(2.1 万トン)の 5 割であった。この不漁の主な原因は資源量の減少にあると考えられる。また、価格はほぼ全ての月で 2019 年以降最高であった。
- ・海域別にみると、1~11 月の累計水揚量は、三陸(底曳網主体)で前年比 150%と上回り、青森太平洋側(昼釣り主体)は前年並み(96%)、他の海域は前年を下回り、北海道が 54%、九州が 56%、日本海が 28%。

であった。三陸と青森太平洋側の水揚量が他海域よりも好調だった原因として、比較的来遊量が多かったことが考えられる。一方、日本海での不振は、対馬暖流が強勢で高水温が継続したことから、スルメイカの南下の遅れや漁場形成に影響したと考えられる。

- ・冷凍スルメイカの 1～11 月の累計水揚量水揚量は 1.6 千トンで、前年(3.9 千トン)の 4 割、2019～2022 年の平均 (5.8 千トン)の 1/4 であった。価格は全ての月で 2019 年以降最高であった。

● アカイカ

- ・北太平洋の沖合域でのアカイカの操業(夏漁)は 11 月で終了した。本年の水揚量は前年並みの 2.8 千トンで、過去 5 年(2018～2022 年)平均の 55%であった。
- ・本年の平均価格は前年並みの 966 円/kg であった。
- ・夏漁の資源水準を表す 1 日 1 隻当たり漁獲量(CPUE: 胴肉ケース数/日・隻)は、2020 年をピークに減少傾向にある。このため、今漁期は 7 月以降も 2 航海目の操業を行う船もあったが、全般的に漁獲が伸びなかった。

1. わが国周辺の海況

(1) 海域別海況概要

現在継続中の黒潮大蛇行は 2018 年 8 月の開始から 6 年半におよび過去最長となった。また、黒潮主流は 2023 年を通して三陸沖まで北上した。日本近海の海面水温は、北部太平洋や日本海の沖合を中心に、近年(2011~2020 年平均)より高めで推移した。以下に海域別の詳細を示した。

1) 黒潮域・東シナ海

・黒潮流路

冬季 房総半島沖で一時的に離岸したが、大王埼沖の 30° N 前後まで南下して遠州灘沖で屈曲する安定した流路であった(図 1-1A)。

春季~夏季 九州~四国沖の変動が徐々に東進するように下流側に伝わり(図 1-2B, 3B)、7 月に伊豆諸島付近に小蛇行が発生して一時的に W 字型流路(図 1-3B)をとった。春季は極端な S 字型流路をとることが多く、流路の屈曲部が熊野灘に接岸することもあった。

秋季 蛇行北上部が徐々に東進するとともに屈曲部も石廊崎沖付近まで東進し、11 月には三宅島~八丈島の間を北東に流れた(図 1-4B)。

・海面水温

四国沖海域(図-1①) 冬季~春季は一時的な黒潮流軸の接岸により平均水温が近年より高めの時期もあったが、黒潮流軸の離岸の影響で近年より低めであった(図 2)。夏季は、8 月の台風通過により降温して一時的に近年より低めの期間もあったが、記録的な猛暑の影響で沿岸部を中心に近年より高めの期間が多かった。秋季には近年より高めの海域は徐々に縮小した。

遠州灘~熊野灘沖(図 1-A) 黒潮流軸の接岸や暖水波及の影響で平均水温は近年より高めの期間が多く(図 2)、4 月上旬や 5~6 月には黒潮流軸が接岸して熊野灘付近は著しく高めの海域があった(図 1-2A)。夏季は黒潮流軸の屈曲部からの暖水波及によりおおむね高めであったが、台風通過の影響で 8 月は一時的に近年より低めの時期もあった。秋季は、蛇行北上部の東進により、近年より高めの海域

は徐々に縮小した。

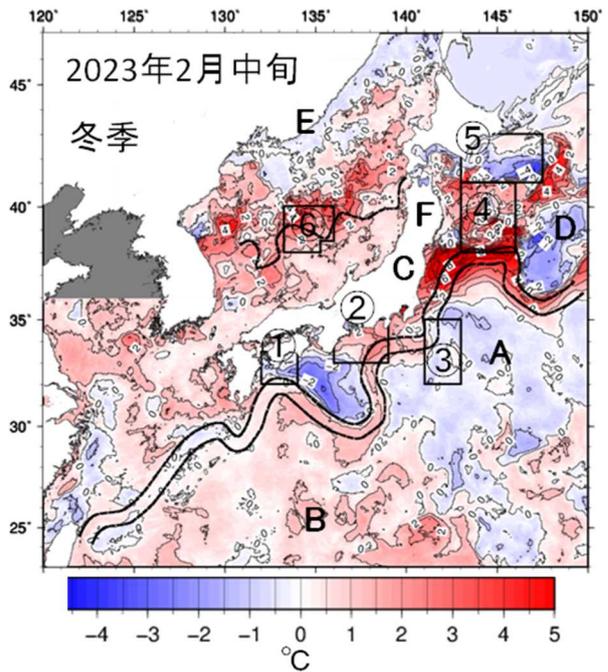


図 1-1A. 2023 年冬季(2 月)の海面水温の近年差

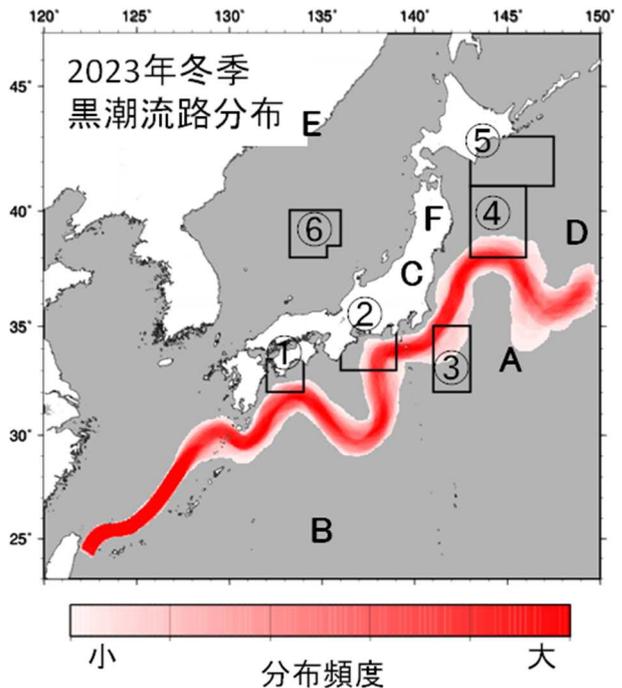


図 1-1B. 2023 年冬季の黒潮流軸分布

関東南東沖海域(図 1-③)・関東東沖(図 1-A) 冬季には季節風等の影響で近年より低めの海域が多く、春季も風が強く日射量が少なかった影響で近年より平均水温は低めで推移した(図 2)。夏季は猛暑の影響で近年より高めの期間が多かったが、8 月

は台風通過の影響で一時的に低めになった。秋季は風が強かった影響で、近年より高めの海域は徐々に縮小した。

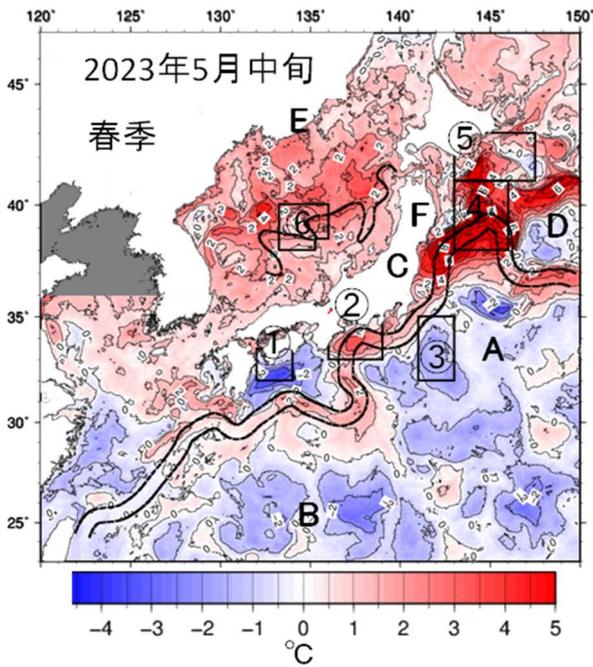


図 1-2A. 2023 年春季(5 月)の海面水温の近年差

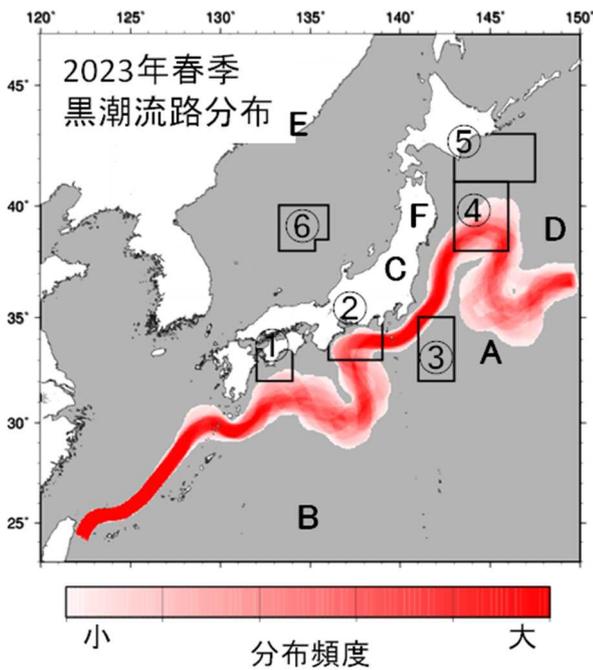


図 1-2B. 2023 年春季の黒潮流軸分布

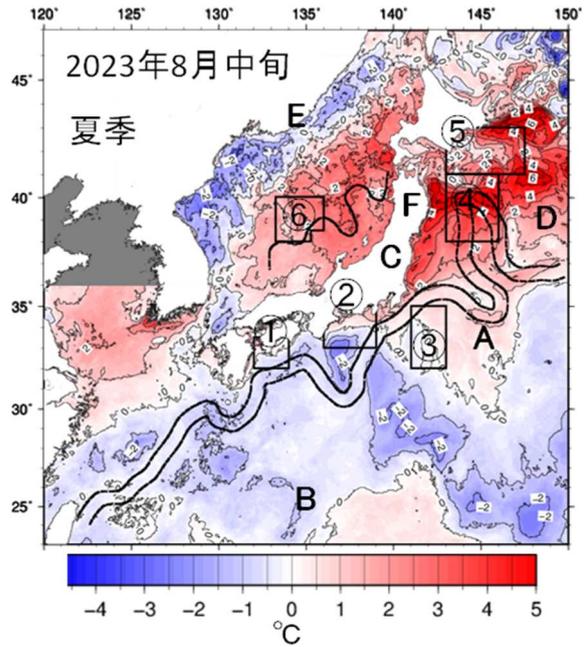


図 1-3A. 2023 年 8 月(夏季)の海面水温の近年差

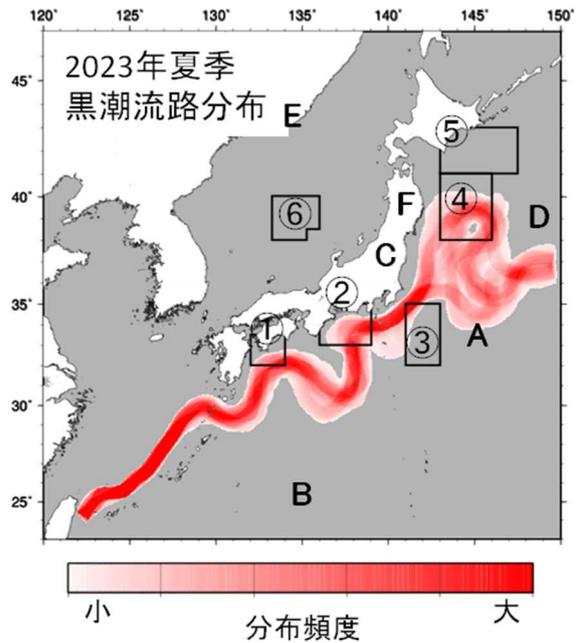


図 1-3B. 2023 年夏季の黒潮流軸分布

沖縄東沖～本州南方沖(図 1-B) 冬季は季節風が弱く近年より高めであった。春季は風が強く日射量が少なかった影響で低めであり、夏季も台風通過の影響で低めの期間が多かった。秋季は近年より高めの海域は縮小した。

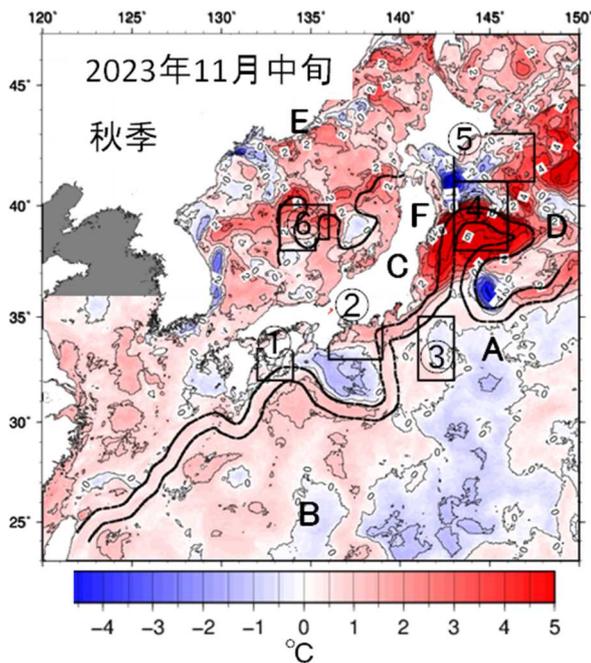


図 1-4A. 2023 年秋季(11 月)の海面水温の近年差

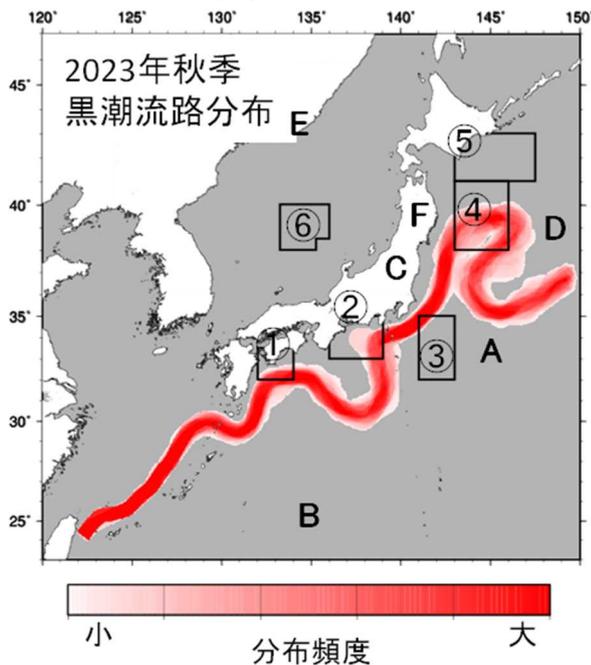


図 1-4B. 2023 年秋季の黒潮流軸分布

東シナ海 気象の影響による変動が大きく、黄海周辺や九州西沖はおおむね近年より高めで推移し、東シナ海南部は冬～春季は季節風や寒気と等の影響で低めの期間が多かった。夏季は日射などの気象の影響で近年より高めの期間が多かったが、8 月は台風通過の影響で南部を中心に低めの期間もあった。秋季は近年より高めの海域は徐々に縮小した。

2) 親潮域・混合水域

・親潮

親潮勢力(100m深で5°C以下の面積)は、前年秋季から本年秋季前半にかけて平年(1993~2017年の平均)よりかなり弱い状態が続いたが、秋季後半は平年より弱いものの拡大傾向にある。親潮第一分枝は、冬季には一時的に三陸北部沿岸まで南下したが、春季以降は道東沖に停滞した。秋季には再び道東を南下して三陸北部沖合まで南下しつつある。

・黒潮続流流路

冬季 流路の北上部は常磐で接岸し、三陸沖まで北上した(図 1-1B)。

春季 北上部が常磐で接岸し、三陸沖では徐々に北上が進み、後半には40°N以北に達した。これは明確な観測がある中では最北であった(図 1-2B)。

夏季 変動が激しく、8月は北上部の著しい離岸や北上部が切り離されたことによる巨大な暖水渦が形成された。9月には暖水渦が黒潮続流に再び結合し、北上部は徐々に接岸した(図 1-3B)。

秋季 北上部がおおむね接岸し、三陸沖まで北上が続いた。後半は一時的に暖水渦が切り離されたが、その後再び結合した(図 1-4B)。

・海面水温

常磐海域(図 1-C) 黒潮続流の接岸の影響で沿岸を中心に年間を通して近年より高めで推移し、冬～春季は6°C前後高め海域もあった(図 1-A, 2-A)。

道東海域(図 1-⑤)～**三陸沿岸海域**(図 1-F) 冬～春季は親潮系冷水の南下により近年より低めの海域(図 2)もあったが、春季後半～夏季は黒潮続流の北上によりほぼ全域で高めになり、8月には道東海域では近年最高の+4°Cを記録した(図 2)。秋季は親潮系冷水の南下により近年より低めの海域もあった。

三陸沖海域(図 1-④) 黒潮続流の北上のため近年より4°C以上高め海域が広範囲にみられ、年間を通して高めであった。黒潮続流の北上が進んだ春季後半は近年最高の+5.3°Cを記録した(図 2)。

三陸はるか沖合(図 1-D) 黒潮続流蛇行部南下の影響で冷水が南下し、おおむね近年より低めの海

域が多かったが、夏季は黒潮続流から暖水が波及して高めの海域もあった。

3) 日本海

対馬暖流

勢力は、夏季に一時的に平年並みの期間があったが、おおむね強め～かなり強めであった。

冬季 山陰西部沖で蛇行して南下し、大和堆付近に北上後、北陸～東北沖ではおおむね離岸した。

春季 隠岐諸島北沖でS字型に蛇行して大和堆付近を通過することが多く、北陸～東北沖ではおおむね離岸した。

夏季 隠岐諸島北沖を北上し、大和堆付近を通過して能登半島～佐渡北沖で蛇行し、東北沖では離岸した。

秋季 10月までは隠岐堆北沖と佐渡北沖で蛇行し、11月以降は隠岐諸島北沖を北上して大和堆付近と能登半島北沖で蛇行した。東北沖では離岸が続いた。

海面水温

日本列島側 対馬暖流の勢力が平年より強く、夏季には記録的な猛暑の影響もあり近年より高めの海域が多かったが、秋季以降は対馬暖流蛇行部に冷水が南下した影響で、山陰東部～北陸沖には低めの海域があった。

沖合 対馬暖流の勢力が強く、離岸した影響で年間を通して高めの海域が多かった。大和堆海域(図1-⑥)の平均水温は年間を通して1℃以上高めで、春季と夏季には近年最高レベルの+3℃を記録した(図2)。

東朝鮮暖流域 対馬暖流の勢力が強かった影響で、おおむね近年より高めで推移したが、夏季は台風通過の影響で一時的に近年より低めであった。

日本海北部(図1-E) 冬季は季節風の影響で近年より低めであったが、春季以降は台風通過の影響で一時的に低めの期間もあったが、日射など気象の影響もあり高めの期間が多かった。

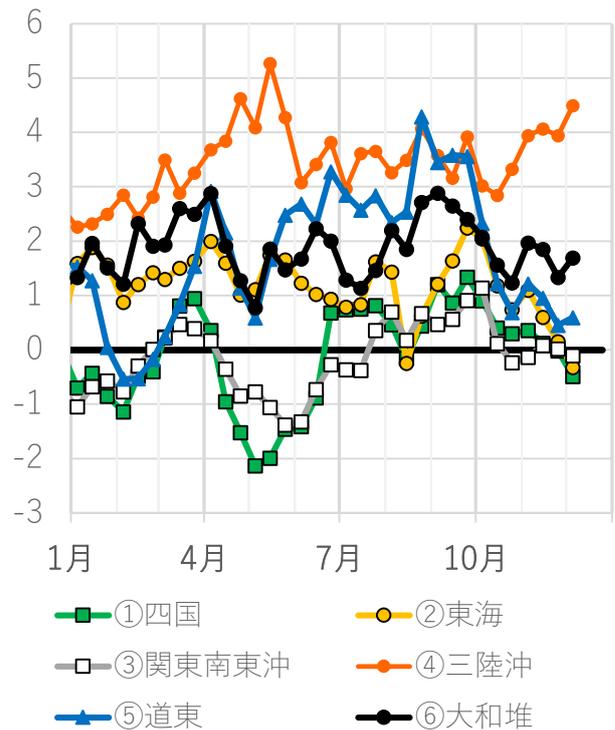


図2. 海域毎の海域平均海面水温の近年差(各海域の範囲は図1-①～⑥参照)

(2) 黒潮大蛇行の今後について

黒潮大蛇行が解消する過程について、川辺(2003)は大蛇行部が東進して伊豆海嶺をまたぎ、流路が八丈島の南を通るようになってから数カ月で※非大蛇行離岸流路(C型流路)に移行するとしている。そのため、2023年11月(図3-②)と過去5回(1975～1980年、1981～1984年、1986～1988年、1989～1990年、2004～2005年)の大蛇行の終了前の4カ月間の流路分布(図3-①)の比較を行った。

過去5回の黒潮大蛇行の終了前4カ月間において、蛇行最南下部はおおむね石廊崎沖付近に位置し、八丈島の南を通過する流路もみられ、潮岬ではかなり接岸して非大蛇行離岸流路(C型流路)に近い流路もみられた。一方、2023年11月は蛇行最南下部が遠州灘沖に位置し、潮岬沖では過去5回の黒潮大蛇行より離岸していた。

以上により、今回の黒潮大蛇行は少なくとも今後半年程度は維持されるのではないかと考えられる。

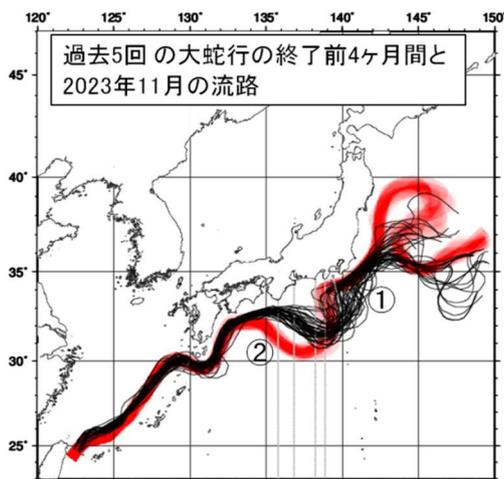


図3. ①過去5回の大蛇行の大蛇行終了前4カ月間の流路分布(黒線)と②2023年11月の流路分布(赤塗)
(黒潮流路については、2015年以降は海上保安庁海洋情報部の海流GISデータ、2014年以前は日本水路協会のMIRC黒潮流軸データセットを使用)

※本州南方での黒潮流路は、図4のように、

- ①潮岬に接岸して東海沖をほぼ直進する非大蛇行接岸流路(N型流路)
 - ②潮岬に接岸し、伊豆海嶺付近で蛇行して八丈島の南を通る非大蛇行離岸流路(C型流路)
 - ③潮岬では離岸し、熊野灘～遠州灘沖で大きく蛇行する大蛇行流路(A型流路)
- に分類される。

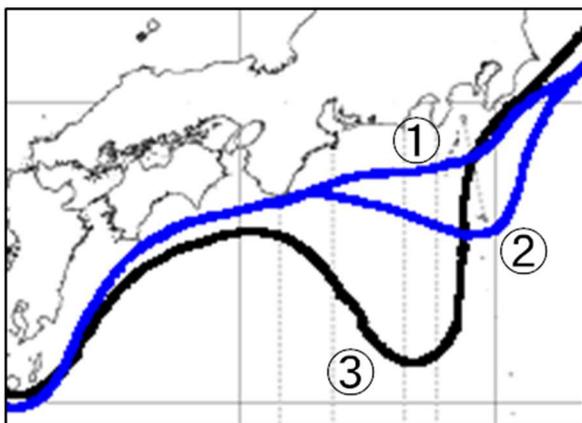


図4. 本州南方での黒潮流路の分類(気象庁Webページ海水温・海流の知識の図1:本州南岸を流れる黒潮の典型的な流路を改変)

参考文献

川辺正樹 2003: 黒潮の流路と流量の変動に関する研究. 海の研究, 12, 247-267.

(海洋事業部 矢野泰隆)

2. 主要魚介類の水揚量・市況動向

(1) 主要港における主要魚種の動向

JAFICが調査している全国主要117港における2023年(注)の調査対象全魚種の累計水揚量は177万2千トンで、2022年(184万5千トン)の96%と、現在と同じ規模で調査を開始した2010年以降で最低となった(表1)。平均価格は253円/kgで、2022年(240円/kg)の106%と2010年以降で最高価格であった。なお、本報告の水揚量と価格は、JAFIC「おさかなひろば」による。2023年11月は速報値である。また、水揚量・価格ともに「前年同期並み」とあるのは増減率5%以下の場合を示す。

(注)20XX年とあるのは前年12月から当該年11月までの期間を示したものである。

表1. JAFIC調査港の2023年の月別水揚量(トン)と平均価格(円/kg)および前年同期との比較

月	2023年		2022年		前年対比	
	水揚量	価格	水揚量	価格	水揚量	価格
12	112,026.3	352	142,717.3	246	78%	143%
1	123,628.7	253	121,157.8	208	102%	122%
2	131,058.7	223	123,059.9	203	106%	110%
3	169,299.1	195	169,196.3	163	100%	120%
4	127,895.8	230	153,713.7	179	83%	128%
5	154,264.2	255	179,579.5	190	86%	134%
6	177,509.9	228	149,387.8	235	119%	97%
7	181,501.6	193	192,501.8	201	94%	96%
8	96,690.6	285	99,767.7	270	97%	106%
9	189,276.1	283	179,020.4	348	106%	81%
10	236,611.0	276	222,851.1	303	106%	91%
11	72,956.1	346	112,938.0	334	65%	104%
合計	1,772,717.9	253	1,845,891.2	240	96%	106%

(2) 主要49魚種の水揚量と平均価格

主要49魚種の2023年の魚種別の累計水揚量と平均価格を前年同期と比較した(表2、図5)。

水揚量は、ウルメイワシ、生鮮カツオ、生鮮メバチなど11魚種が前年同期を上回り、マイワシ、ギンザケ(養殖)、冷凍メバチなど10魚種は前年同期並み、さば類、生鮮スルメイカ、アキサケなど28

魚種は前年同期を下回った。平均価格は、カタクチイワシ、マアジ、冷凍スルメイカなど 31 魚種が前年同期を上回り、ニシン、メカジキなど 8 魚種は前年同期並み、ビンナガ、サンマ、冷凍ミナミマグロなど 10 魚種は前年同期を下回った。

(3)産地市場において継続する魚価高

2023 年の産地市場における平均価格は、前述のとおり、全般的に高値基調であった。2022 年よりも水揚量が低調な魚種が多かったことがその要因と考えられる。また、貿易統計(財務省)によると、2023 年 1～10 月の全水産物の輸入量は 175 万トンで前年同期(180 万トン)の 97%、平均輸入価格は 929 円/kg で前年同期(910 円/kg)の 102%であった。ロシアのウクライナ侵攻の継続や円安の進行により高価格で推移したとみられ、このことも産地市場の魚価高の要因と考えられる。一方、家計調査結果(総務省統計局)によると、全国の 2 人以上世帯の 1 世帯当たりの生鮮魚介類の購入数量は 2023 年 1～10 月の累計で前年同期の 92%とやや下回ったが、平均価格は前年同期の 111%と上回り、依然として水産物の価格高が継続している。

(4)産地市場における代表魚種の月別動向

産地市場において水揚量の多いさば類、養殖魚の代表としてのマダイおよび福島第一原子力発電所における ALPS 処理水の海洋放出に伴う中国の日本産水産物の禁輸の影響が懸念されるほたてがいが(殻付)について動向を検討した。

1)さば類

2023 年の累計水揚量は 20 万 5 千トンで前年(26 万 6 千トン)の 77%であった。平均価格は 136 円/kg で前年(121 円/kg)の 113%であった。水揚量は、4、6～7 月を除き前年同月を下回り、価格は年間を通じて前年同月並み～上回って推移した(図 6)。また、貿易統計(財務省)によると、2023 年 1～10 月の冷凍さば類の輸出量は 6 万 9 千

ンで、水揚量が低調だったこともあり、前年同期の 62%であった。単価は前年同期比 108%の 162 円/kg に上昇し、金額は 169 億 5 千万円と前年同期の 66%にとどまった。

表2. JAFIC 調査港における 2023 年の魚種別水揚量(トン)と平均価格(円/kg)および前年同期との比較(2022 年の平均価格の昇順に並べ、1,000 円/kg 以上の魚種を赤字で示した。)

	2023年		2022年		前年比	
	水揚量	価格	水揚量	価格	水揚量	価格
カタクチイワシ	8,372.8	88	9,977.9	42	84%	207%
マイワシ	609,340.2	71	595,744.4	45	102%	159%
スケトウダラ	72,509.9	65	110,713.9	59	65%	110%
ウルメイワシ	50,614.2	98	38,318.9	63	132%	157%
ホッケ	17,646.6	107	17,718.5	63	100%	170%
ニシン	4,466.8	102	5,340.1	105	84%	98%
さば類	205,379.9	136	266,476.1	121	77%	113%
マアジ	63,954.1	273	79,402.8	206	81%	132%
ほたてがいが殻付	83,670.6	209	55,527.7	213	151%	98%
マダラ	29,928.0	257	34,689.3	225	86%	114%
ブリ	35,046.3	316	43,850.2	257	80%	123%
冷カツオ	147,875.9	317	154,989.7	260	95%	122%
かれい類	8,859.7	319	11,430.9	272	78%	117%
生カツオ	50,906.6	385	32,552.7	407	156%	94%
冷キハダ	35,794.1	500	39,507.5	450	91%	111%
マダイ(天然)	3,180.4	734	4,709.8	517	68%	142%
ビンナガ	23,214.3	470	13,307.1	521	174%	90%
サンマ	22,151.1	422	17,006.1	575	130%	73%
ヒラマサ	644.9	930	1,022.8	644	63%	144%
さわら類	1,121.1	861	2,343.0	700	48%	123%
ヤリイカ	3,483.5	761	2,657.7	722	131%	105%
マカジキ	487.5	843	495.0	724	98%	116%
生スルメイカ	11,485.8	932	15,446.7	755	74%	123%
アキサケ	52,716.9	698	78,793.1	761	67%	89%
ギンザケ(養殖)	12,116.9	746	11,608.0	816	104%	91%
マダイ(養殖)	199.1	1,081	427.8	863	47%	125%
たこ類	4,762.8	1,117	4,687.0	886	102%	126%
サザエ	255.4	1,022	388.0	887	66%	115%
ヒラメ(天然)	1,637.4	1,005	1,610.1	930	102%	108%
生キハダ	9,550.8	916	8,858.6	961	108%	95%
あなご類	534.4	1,283	688.8	994	78%	129%
冷スルメイカ	2,063.4	1,488	4,677.7	1,031	44%	144%
冷メバチ	17,502.7	878	16,946.2	1,108	103%	79%
メジマグロ(ヨコワ)	598.7	1,010	430.2	1,131	139%	89%
ハマチ(養殖)	146.7	1,254	95.4	1,230	154%	102%
メカジキ	2,567.2	1,288	2,433.7	1,267	105%	102%
生メバチ	5,373.4	1,124	4,369.8	1,330	123%	85%
アカムツ(ノドグロ)	265.9	2,021	356.0	1,616	75%	125%
ヒラメ(養殖)	19.2	2,094	35.7	1,658	54%	126%
キンメダイ	1,914.2	1,763	2,077.4	1,675	92%	105%
あまだい類	167.5	2,569	224.9	2,251	74%	114%
キンキ(キチジ)	601.8	2,826	807.3	2,263	75%	125%
冷ミナミマグロ	4,373.2	2,135	4,637.8	2,415	94%	88%
クロマグロ	3,714.0	2,728	3,945.8	2,547	94%	107%
トラフグ	126.7	5,293	156.8	4,056	81%	131%
あわび類	26.0	9,137	72.5	5,538	36%	165%
クルマエビ	21.7	4,845	18.6	5,679	117%	85%
イセエビ	123.7	6,410	146.0	5,954	85%	108%
うに類(剥き身)	65.2	14,260	63.6	14,800	103%	96%

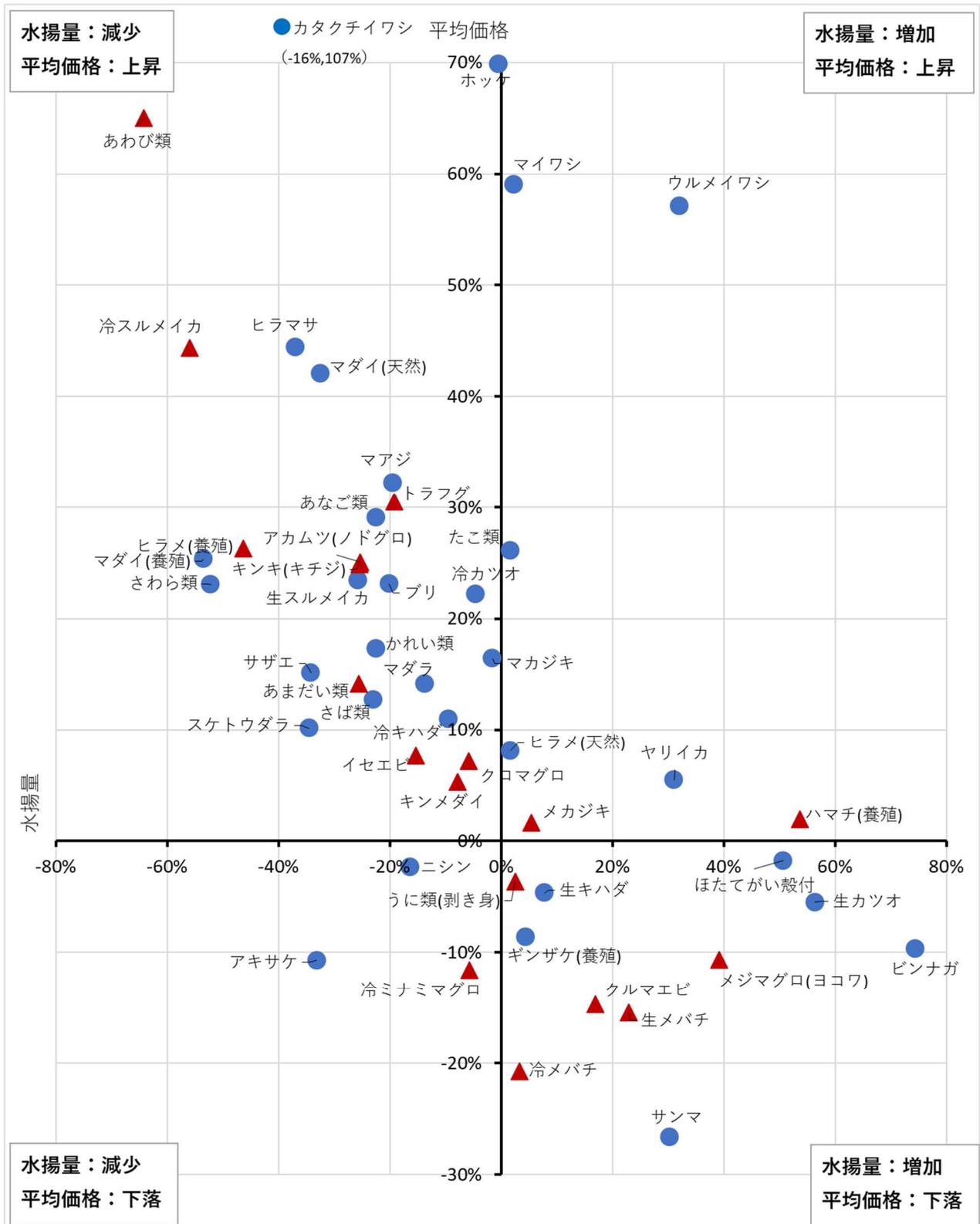


図 5. 主要 49 魚種の水揚量と平均価格の比較(2023 年/2022 年)。横軸と縦軸の目盛に記載した%は、前年同期比の増減率を示す。▲は 2022 年の平均価格が 1,000 円/kg 以上、●はそれ未満の魚種を示す。目盛の範囲外にある魚種については、水揚量と価格の増減率をカッコ内に示す。

2)マダイ(養殖) 2023 年の累計水揚量は 200 トンで前年(430 トン)の 47%であった。平均価格は 1,081 円/kg で前年(863 円/kg)の 125%であった。水揚量は、前年

同月並みであった 7 月を除き年間を通じて前年を下回り、価格は前年を上回る高値で推移した(図 7)。

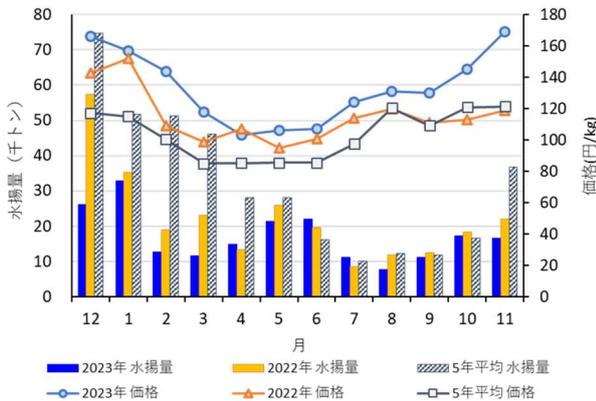


図 6. さば類の水揚量と価格の推移

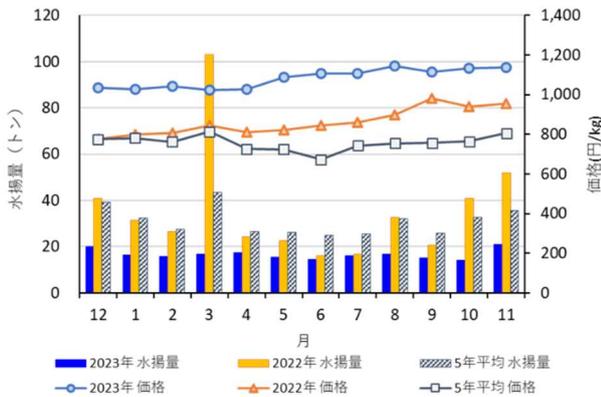


図 7. マダイ(養殖)の水揚量と価格の推移

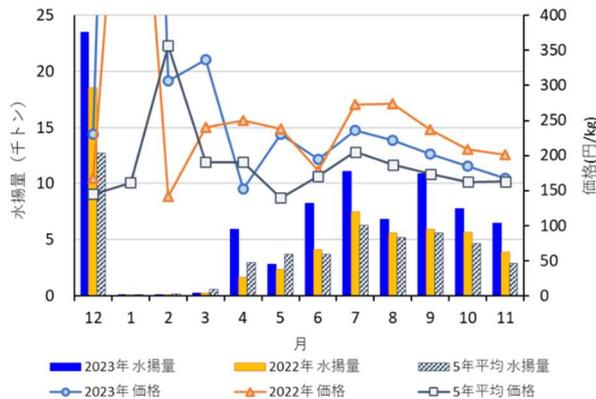


図 8. ほたてがいがい(殻付)の水揚量と価格の推移

3) ほたてがいがい

ほたてがいがい(殻付)の 2023 年の累計水揚量は 8 万 3 千トンで前年(5 万 5 千トン)の 151%であった。平均価格は 209 円/kg で前年(213 円/kg)の 98%であった。4 月以降、水揚量が前年同月を上回ったこともあり、価格は 6~7 月を除き前年同月を下回って推移した(図 8)。なお、貿易統計(財務省)によると、冷凍ほたてがいがいの輸出は、ALPS 処理

水の放出を理由に中国が日本産水産物の輸入を停止したことを受け、9 月には殻付・むき身ともに中国向けの輸出がゼロとなり、2023 年 1~10 月の冷凍ほたて(殻付・むき身の合計)の輸出量は 6 万 2 千トン(前年比 56%)、金額は 510 億円(前年比 63%)にとどまった。

(5) 東京都中央卸売市場における動向

東京都中央卸売市場の水産物の取扱数量と平均価格を表 3 に示した。2023 年(2022 年 12 月~2023 年 10 月)の累計取扱数量は 28 万 3 千トンで、前年同期(30 万 1 千トン)の 94%であった。平均価格は 1,492 円/kg で前年同期(1,321 円/kg)の 113%であった。月別に見ると、12~8 月は前年同月を上回り、9~10 月は前年同月並みで推移した。

表 3. 東京都中央卸売市場の 2023 年の月別取扱数量(トン)と平均価格(円/kg)および前年同期との比較

月	2023年		2022年		前年対比	
	数量	価格	数量	価格	数量	価格
12	30,593.8	1,841	34,425.8	1,534	89%	120%
1	22,009.8	1,497	24,707.7	1,191	89%	126%
2	23,158.6	1,446	24,159.3	1,166	96%	124%
3	26,994.3	1,448	28,486.0	1,171	95%	124%
4	26,884.7	1,380	31,207.4	1,207	86%	114%
5	26,118.3	1,427	28,265.7	1,239	92%	115%
6	27,289.5	1,404	28,200.2	1,296	97%	108%
7	24,719.3	1,491	25,860.3	1,378	96%	108%
8	23,154.0	1,512	23,657.7	1,409	98%	107%
9	24,601.7	1,466	24,869.0	1,459	99%	100%
10	27,416.8	1,446	27,372.7	1,453	100%	100%
合計	282,940.7	1,492	301,211.8	1,321	94%	113%

(出典:東京都中央卸売市場 市場統計情報)

次に、前項で産地市場における動向を比較したさば類、マダイ(養殖)、ほたてがいがいについて、東京都中央卸売市場における動向を検討した。なお、2023 年 11 月は豊洲市場の速報値である。

1) 生鮮さば類

2023 年の累計取扱数量は 6 千 100 トンで前年(7 千 400 トン)の 83%、平均価格は 559 円/kg で前年(455 円/kg)の 123%であった。産地市場の不漁に伴って推移し、数量は 6~7、11 月を除いて前年同月を下回り、価格は 9、11 月を除いて前年同月を上回った(図 9)。

2)生マダイ(養殖)

2023年の累計取扱数量は1万トンで前年(1万1千トン)の95%、平均価格は1,210円/kgで前年(1,029円/kg)の118%であった。産地市場の高値を反映し、価格は9~10月を除き前年同月を上回って推移したものの、前年との差は縮小しつつある(図10)。

3)ほたてがい(殻付)

2023年(10月まで)の累計取扱数量は1千100トンで前年同期(1千トン)の105%、平均価格は774円/kgで前年同期(721円/kg)の107%であった。価格は12~4月は前年同月を上回ったものの、5月以降は前年並み~前年を下回って推移した(図11)。

4)ほたてがい(むき身)

2023年(10月まで)の累計取扱数量は920トンで前年同期(910トン)の101%、平均価格は4,201円/kgで前年同期(3,918円/kg)の107%であった。

12~7月は、数量は前年同月並み~下回り、価格は前年並み~上回ったものの、8月以降は、数量は前年同月を上回り、価格は前年同月を下回って推移した(図12)。

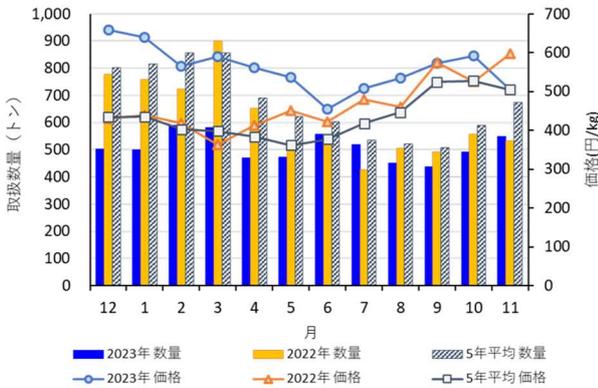


図9. 生鮮さば類の取扱数量と価格の推移

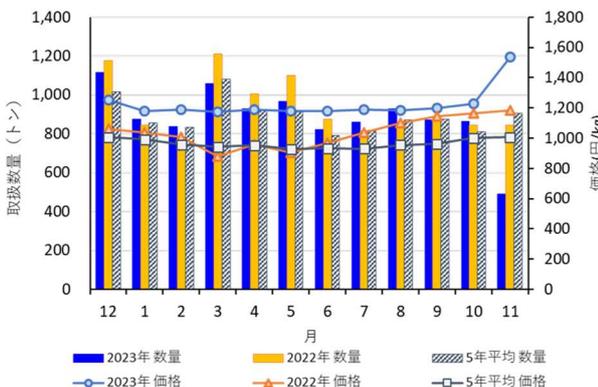


図10. 生鮮マダイ(養殖)の取扱数量と価格の推移

移

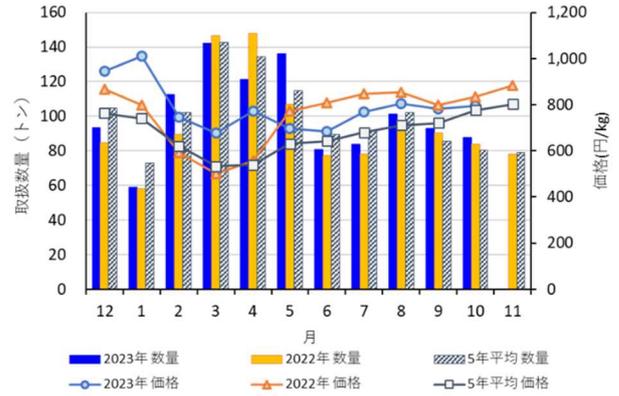


図11. ほたてがい(殻付)の取扱数量と価格の推移

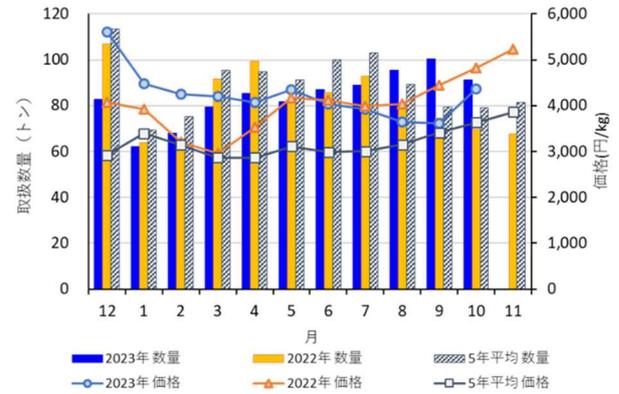


図12. ほたてがい(むき身)の取扱数量と価格の推移

(6)まとめ

2023年は、産地市場では2022年と比較すると、全般的に水揚量が低調な魚種と価格が上昇した魚種が多かった。一方で、全国主要港・全魚種の比較では、前年が著しく高値だったこともあり、2023年の前半にかけて価格が前年並み~下回って推移した月もあった。

また、東京都中央卸売市場では、年間を通じて数量は前年同月並み~下回り、価格は前年同月並み~上回って推移した。産地価格の上昇や燃油価格の高騰、円安の影響により、消費地価格は高値の状態が続いたものの、徐々に前年並みに落ち着きつつある。魚種別に見ると、生鮮さば類は産地市場の不漁により価格が変動した。養殖魚の生鮮マダイは、産地価格が高値だったことから、消費地価格も高値で推移したが、前年との差が縮小しつつある。一方で、ほたてがいは、殻付・むき身ともに2023年の前半は高値で推移したものの、後半は前年並み~やや下回った。特に、むき身は

7月以降、数量は増加傾向、価格は弱含みとなっており、ALPS 処理水の放出を理由に中国が日本産水産物の輸入を停止したことを受け、価格の割安感から国内消費地での引き合いが強くなっていることが示唆される。

以上のように、産地市場と消費地市場において水揚量と取扱数量が減少する一方で、魚価高の状況が続いており、依然として消費者の「魚離れ」の増大は懸念されるものの、徐々に前年並みに戻りつつあることから、今後の水産物需給の安定に期待しつつ市況の動向を注視したい。

(水産情報部 石山なな子)

3. 魚種別の漁海況・市況

(1) マイワシ・さば類・マアジ

● マイワシ

マイワシの全国主要港における本年11月末現在の水揚量は60.5万トン(太平洋側53.3万トン、日本海側7.2万トン)に達しており、前年同期(58.3万トン)を約2万トン上回った(図13)。道東沖では6~10月にまき網船が25.1万トンを漁獲し、前年の22.4万トンを上回った。太平洋側のまき網では、1~6月は体長17~19cm(2、3歳魚)主体に好漁で、20cm以上(4歳魚以上)も混じった。10月も1~6月と同様の魚体サイズのものを中心に好漁であった。日本海側では水揚物の体長は3~5月は15~17cm前後(1歳魚)主体であったが、6~7月は17~20cm(1歳魚以上)主体であった。また、9月末~10月初旬には12~13cm(0歳魚)主体のまとまった水揚げがあったが一時的であった。価格は、世界的なフィッシュミール価格の動向や国内での加工向け需要の増加などを反映し、2019~2022年を上回る高水準で経過した(図14、トピックス「魚粉価格とアンチョベータとマイワシ」参照)。

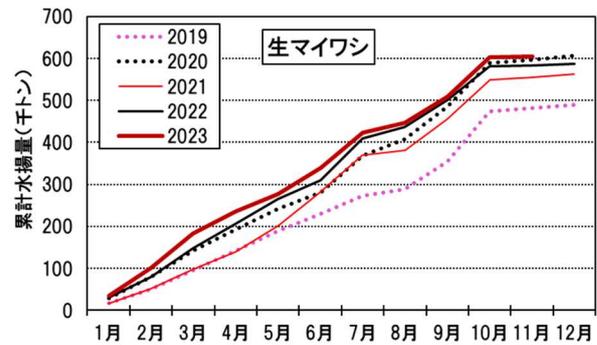


図13. 2019~2023年の全国主要港における生鮮マイワシの月別水揚量の推移

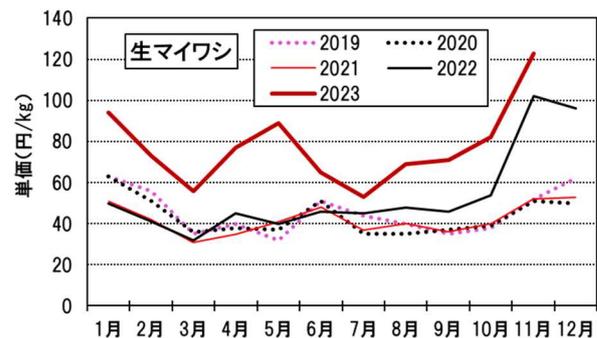


図14. 2019~2023年の全国主要港における生鮮マイワシの月別単価の推移

● さば類(マサバ、ゴマサバ)

さば類の全国主要港における本年11月末現在の水揚量は17.9万トン(太平洋側8.0万トン、東シナ海・日本海側9.9万トン)で、不漁だった前年同期(20.7万トン)を更に下回り、2019年以降で最も少なかった(図15)。太平洋側では、2021年以来海洋熱波などに起因した不漁が続いている。本年も11月には八戸沖~犬吠沖にまき網漁場が形成されたが、まとまった漁獲は見られず、体長24~25cmの小型魚が主体であった。以上から、11月末現在で本格的な魚群の南下は見られない。東シナ海・日本海側では、対馬海域・九州西沖海域・東シナ海中南部海域の漁獲量は前年および過去5年平均並みであった。1~6月に隠岐海峡周辺で漁獲が続いたが、7月からは水揚量が急減し、9~11月は前年並み~前年を下回った。価格は前年を上回り、高水準であった(図16)。

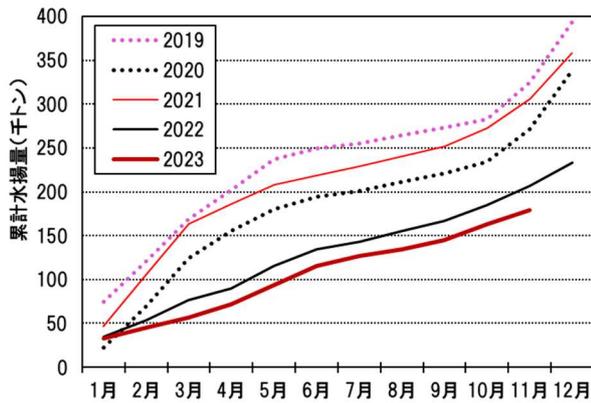


図 15. 2019～2023 年の全国主要港における生鮮さば類の月別水揚量の推移

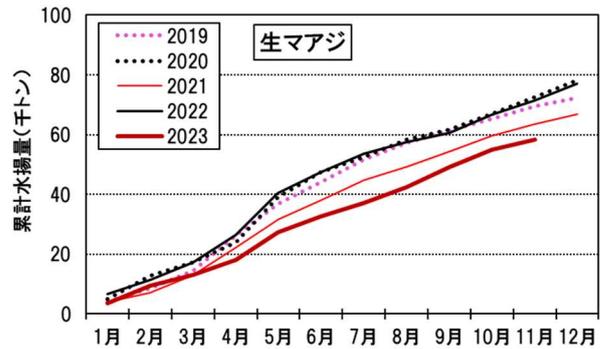


図 17. 2019～2023 年の全国主要港における生鮮マアジの月別水揚量の推移

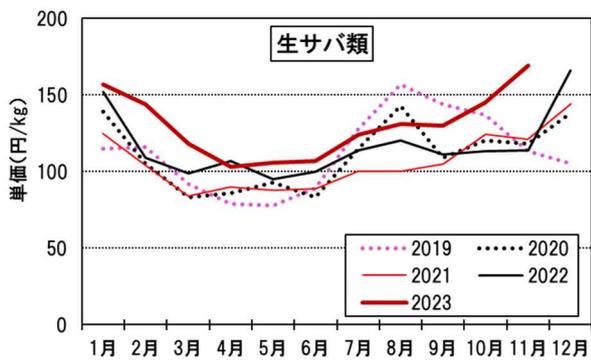


図 16. 2019～2023 年の全国主要港における生鮮さば類の月別単価の推移

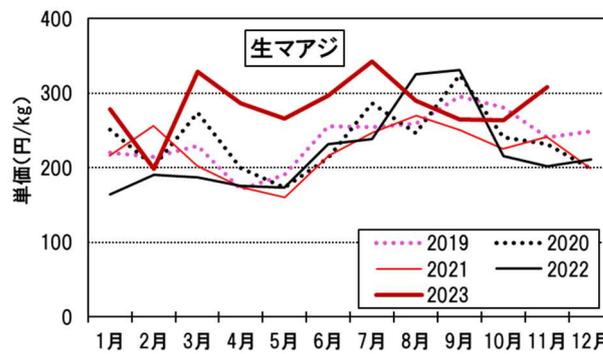


図 18. 2019～2023 年の全国主要港における生鮮マアジの月別単価の推移

(水産情報部 源 浩輔)

● マアジ

マアジの全国主要港における本年 11 月末現在の水揚量は 5.8 万トン(太平洋側 0.9 万トン、日本海側 4.9 万トン)で、前年同期(7.1 万トン)を下回った(図 17)。日本海側では、7 月ごろから隠岐海峡周辺で漁獲が続き、境港における 7～9 月の水揚量は前年を上回ったが、10～11 月は前年を下回った。東シナ海では、8～9 月は中南部海域と九州西沖海域中心に漁獲が続いたものの、1～11 月の累計水揚量は前年を下回った。価格は 8～9 月を除いて前年を上回った(図 18)。

◆ トピックス 魚粉価格とアンチョペータとマイワシ

2023 年上半期のトピックスとして、日本の魚粉の輸入量と輸入金額から算出した魚粉の輸入単価と生鮮マイワシの単価の推移が連動していることを示した。今回は、9 月まで期間を延長して動向を検討した(図 19)。それによると、2023 年 5 月までは生鮮マイワシ単価は魚粉輸入単価と連動していたが、6 月と 7 月は魚粉輸入単価とは関係なく下落し、8 月と 9 月は再度連動して上昇した。

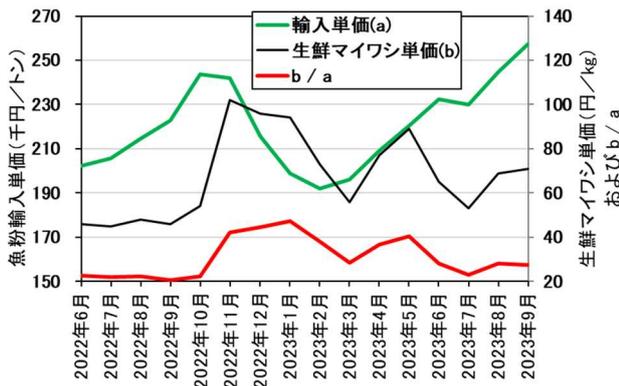


図 19. 2022 年 6 月～2023 年 9 月の日本の魚粉の輸入単価(a)、生鮮マイワシの単価(b)およびの b/a の推移 輸入単価は輸入金額と輸入量から算出(データ出典：<http://www.suisan.or.jp/html/topics.html>)

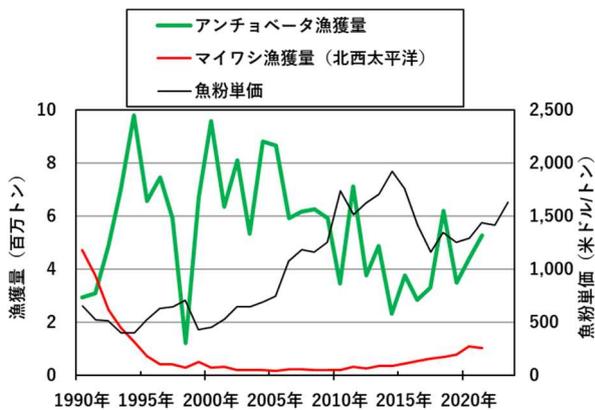


図 20. 1990～2023 年の世界の魚粉単価とアンチョベータとマイワシ(北西太平洋)の漁獲量の推移 (データ出典：<https://www.fao.org/fishery/en/fishstat> および <https://fred.stlouisfed.org/series/PFISHUSDM>) 注: 漁獲量は 2021 年まで

この原因について、近年の魚粉事情を含めて検討した。魚粉の世界単価(トン当たり)は 1990 年から 2005 年ごろまでは安定していたが、2006 年に 1,000 ドルを超え、2019 年には 1,921 ドルのピークを迎えた後にやや低下し、2017 年に 1,161 ドルの底を打った後、再度上昇し 2021 年には 1,442 ドルとなった(図 20)。アンチョベータ(ペルーのカタクチイワシ)は、多い年には約 1 千万トンが漁獲される世界第 1 位の漁獲量を誇るが、2015 年ごろまではアンチョベータの漁獲量と魚粉単価は反比例するように連動して推移してきた(図 20)。なお、1998 年の極端な不漁は強いエルニーニョ現象によるものである。しかし、2014 年

にアンチョベータの漁獲量が近年の最低(232 万トン)から 2021 年の 527 万トンへと徐々に回復したにもかかわらず、魚粉価格は上昇した。その原因として、中国の魚粉需要の増大が指摘されている。さらに、2023 年 6 月にはエルニーニョの発生に伴い、ペルー政府がアンチョベータを禁漁としたことから、魚粉価格が 2023 年 8 月には約 1,800 ドルと高騰した。このように、魚粉の世界価格は上昇傾向にある。気象庁によると、今回のエルニーニョは冬の間は続く可能性が高く(90%)、春の間は続く可能性と平常の状態になる可能性が同程度(50%)とされる。そのため、魚粉の世界価格は当面のあいだ高水準を維持しそうだ。

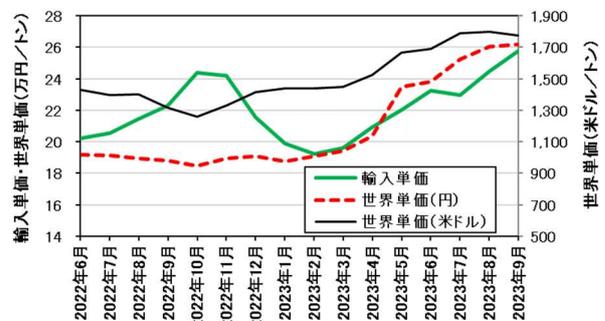


図 21. 2022 年 6 月～2023 年 9 月の日本の魚粉の輸入単価と世界の魚粉単価(米ドルベースと円ベース) (世界魚粉データ出典：<https://fred.stlouisfed.org/series/PFISHUSDM>)

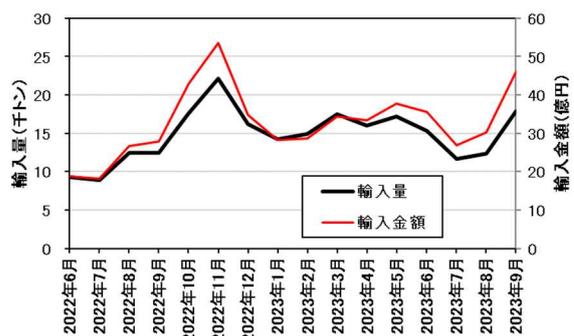


図 22. 2022 年 6 月～2023 年 9 月の日本の魚粉の輸入量と金額 (データ出典：<http://www.suisan.or.jp/html/topics.html>)

次に、魚粉の世界単価と日本の輸入単価を図 21 で比較した。2022 年 8～11 月は、世界単価(円ベース)が安定していたにもかかわらず、輸入単価が高

騰した。この原因として、日本の魚粉輸入量や金額の増加(図 22)によるものと考えられる。しかし、2023 年 8~9 月も輸入単価が再び高騰したが、その増加幅は世界単価(ドルベース・円ベースとも)よりも顕著であった。また、2023 年 8 月の輸入量や金額は 7 月と同程度であった(図 22)。そのため、2023 年 8 月の輸入単価の高騰は世界単価を反映し、9 月の更なる高騰の原因は、世界単価が 8 月同様であったことから日本の魚粉輸入量の増加が影響した可能性がある。

最後に、月別の魚粉輸入価格と生鮮マイワシ単価の推移をみると、2022 年・2023 年とも 6~10 月は輸入単価に比して生鮮マイワシ単価は低かった(図 19 の b/a)。この期間は、道東沖でまき網によりマイワシが大量に水揚げされるため、魚粉の輸入単価に比して生鮮マイワシ単価が低下したと考えられる。また、6~10 月の生鮮マイワシ単価が魚粉輸入単価に比して 2023 年が前年より高くなった原因として、マサバの不漁に伴い缶詰原料としてマイワシが利用されることなど、国内需要の高まりが考えられる。

(水産情報部 谷津明彦)

(2)サンマ

2023 年の水揚量は、前年を上回って推移した(図 23)。平均単価は前年を下回って推移した(図 24)。累計水揚量は 11 月末現在で約 2.4 万トンと、2021 年、2022 年を上回ったものの、過去 3 番目に低かった。累計水揚金額は前年を若干下回った。

2023 年の漁況の経過は以下のとおりである(漁場は図 25、漁獲物の組成は図 26 参照)。8 月は、ロシア主張 EEZ 内での操業を行えない状況にあったこともあり、8 月 1 日の 10 トン未満船が解禁時にはサンマ狙いの出漁は無く、8 月 11 日の 10 トン以上 20 トン未満船解禁時に 1 隻が出漁し、8 月 15 日の 20 トン以上 100 トン未満船が解禁時に 10 隻程度が出漁し、8 月 20 日に 100 トン以上の大型船が出漁した。

8 月の主漁場は、花咲港東 440 海里~東南東 770 海里(19~22℃)(温度は漁場水温、以下同様)の公海であった。漁場は前年よりもやや西側であったが遠く、小型船の多くは出漁できなかった。漁獲物は体長 25~27cm モードであり、漁獲物によっては体長 29~30cm にもモードがあった。体重は 70~80g 台が主体であり、漁獲物によっては 100~120g 台が多く混じ

った。

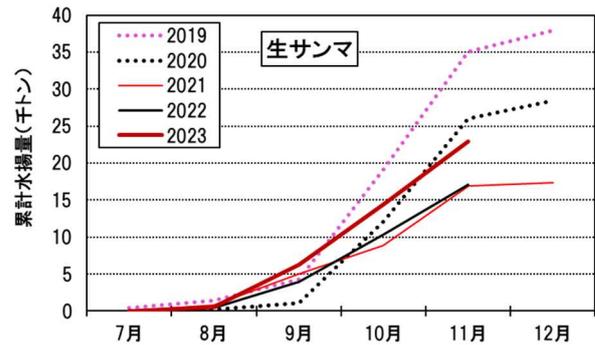


図 23. 生鮮サンマ 2019~2023 年累計水揚量

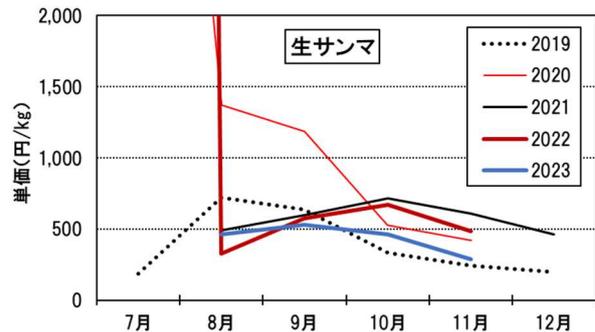


図 24. 生鮮サンマの 2019~2023 年の月別単価の推移

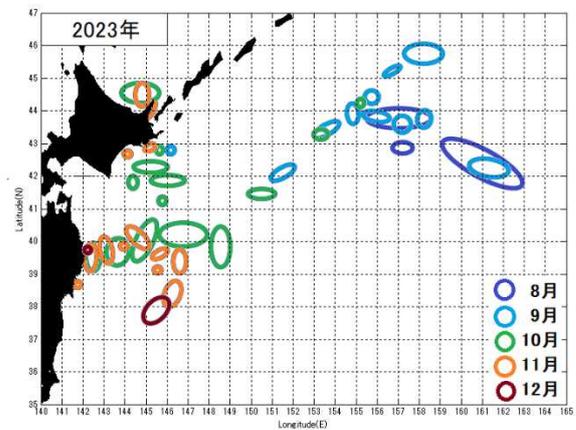


図 25. 2023 年月別サンマ主漁場

9 月の主漁場は、上旬が花咲港東 340 海里~東南東 720 海里(17~22℃)、中旬が花咲港東北東 440~600 海里(15~19℃)と花咲港東 520 海里(20~21℃)、下旬が花咲港東南東 250 海里~花咲港東北東 410 海里(16~20℃)であった。また、9 月下旬には釧路南 30~60 海里にも漁場が形成され、操業できる小型船が増えてきた。漁獲物は、体長 24~26cm 台と 28~30cm 台が主体、体重は 60~70g 台と

100～130g が主体であった。前年と比べると、今年は体重 120g を越える個体が多く、太っていた。

10月の主漁場は、上旬が花咲港東北東 420～450 海里(16～19℃)、花咲港南南東 60 海里～襟裳岬東南東 50 海里(16～18℃)、宮古東 70～100 海里(16～17℃)の 3 箇所、中旬が花咲港東南東 230～260 海里(17～18℃)、花咲港南南東 100 海里～厚岸南 50 海里(15～18℃)、花咲港東南 210～220 海里(16～18℃)、宮古東 20 海里～久慈東 150 海里(14～18℃)の 4 箇所、下旬がオホーツク海の知床半島西沖(9～14℃)、厚岸南 150 海里～花咲港南東 240 海里(16～20℃)、宮古東 30 海里～釜石東 25 海里(17～21℃)、の 3 箇所であった。太平洋における漁獲物は、体長が 21～31cm 台と幅広く、体重は 40～90g 台と 120g 台が主体であった。前年と比べると、今年は 0 歳魚の割合が高かった。オホーツク海における漁獲物は、体長が 22～32cm 台と幅広く、体重は 40～100g 台が主体であり、160g を超える個体も出現した。

11月の主漁場は、上旬がオホーツク海の知床半島西沖(9～13℃)、襟裳岬南東 90～110 海里(14～18℃)、宮古東北東 50 海里～釜石東 10 海里(16～19℃)、久慈東 130 海里(16℃)の 4 箇所、中旬がオホーツク海の羅臼沖(9～13℃)、花咲港南 20 海里～霧多布南 20 海里(9～10℃)、釜石東 10 海里～金華山南 10 海里(16～20℃)、宮古東北東 150 海里～東 220 海里(13～15℃)の 4 箇所、下旬がオホーツク海の羅臼沖(10～11℃)、霧多布南 15 海里～釧路西南西 15 海里(10℃)、釜石東～大船渡東沖の 200～230 海里～金華山東 210 海里(13～17℃)の 3 箇所であった。漁獲物は、道東海域とオホーツク海で、体長 21～27cm 台、体重は 30～80 台が主体であった。三陸海域では、体長 27～30cm 台、体重は 80～110g 台が主体であった。前年と比べると、今年は 0 歳魚の割合が高かった。

12月上旬の主漁場は、金華山東 190 海里～小名浜東北東 220 海里(13～16℃)と釜石東～宮古東沖の 10 海里付近(15℃)であった。漁獲量は少なく、操業を切り上げる船が多かった。12月中旬まで一部の船が残ったものの、その後も時化が多く操業できずに切り上げとなった。2023年の最後の操業は12月5日夜であった。

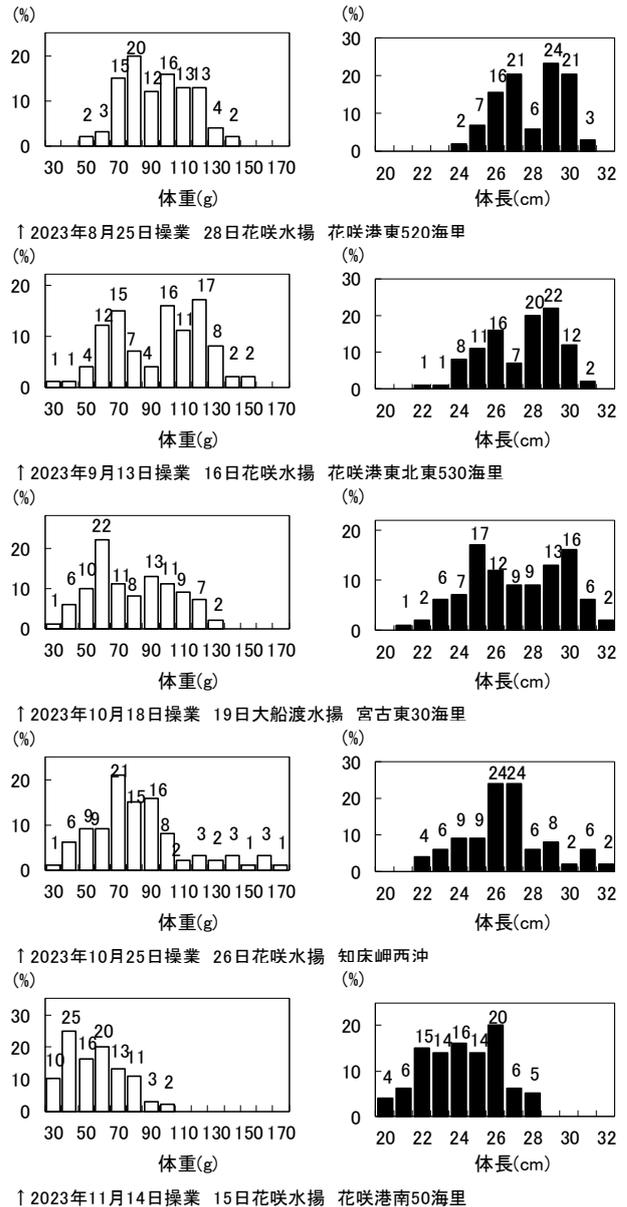


図 26. 2023 年サンマ体重組成と体長組成

水産研究・教育機構が6～7月に行ったトロール調査結果によると漁獲対象となる1区(東経165°以西)および2区(東経165°～180°)の合計推定分布量は前年をやや下回る低水準であった。本年の水揚量はトロール調査結果に反して前年よりも多くなったが、その大きな要因として漁場位置が前年よりも日本に近かったことがある。特に三陸海域では、前年はほとんど漁場が形成されなかったが、本年は10月上旬以降形成されるようになり、漁期後半は公海まで出漁して操業する船が前年よりも少なかった。

本年もオホーツク海で漁場が形成された。サンマ資源が少なくなってきたから、オホーツク海で漁場が形成される事が少なくなったが、前年に引き続き2年連続で漁場が形成された。また本年は知床半島西側

で漁場が持続した事が特徴である。

本年は、1歳魚の太り具合が前年よりもやや良かった時期があったものの、9月から0歳魚の混じりが前年よりも多くなった。このため前年よりも単価が安くなり、結果として水揚量は前年を上回ったものの、累計水揚金額は前年を若干下回ったと考えられる。小型船は漁場が前年よりも日本に近かったことから前年よりも操業の機会が多くなったと考えられるが、大型船としては前年に引き続きかなり厳しい年となった。

(水産情報部 渡邊一功)

(3)カツオ・ビンナガ

● カツオ

近海竿釣り船は例年どおり1月末ごろから出漁した。1~2月の漁場は中南海域の150°E周辺で、魚体はカツオ特大、小笠原南方と南西諸島周辺でカツオ極小主体で始まり、3月はカツオ極小主体で南西諸島周辺に集中した(図27)。また、本年3月は小笠原周辺で隻数は少ないものの漁場が形成された。4月は引き続き南西諸島に漁場が形成され、下旬までには主漁場は熊野灘~伊豆七島周辺に移った(図27)。5月の漁場は高知沖~伊豆諸島沖で、カツオ小を主体に漁獲したが、下旬からは房総~東北海域でビンナガ主体となったためカツオの漁獲量は減少した。その後、7~8月にカツオ主体の漁場が房総沖~東北海域で形成されたが、8月下旬に東北沿岸でカツオの群れが見られなくなり、北海道沖に漁場が移動した。10月になると東北沿岸に親潮系の冷水が南下したことで、沿岸を北上する黒潮系暖水との境に好漁場が形成され、気仙沼港への水揚げが急増した。この沿岸漁場は11月まで続き、11月中旬ごろに近海竿釣り船の操業は終了した。以上に加え、小型船によって九州南方で年間を通じて漁獲されたカツオが鹿児島県に安定的に水揚げされた。

1~11月の全国の釣りによる生鮮カツオの水揚量は33,782トンで、不漁だった前年の134%、過去5年平均の110%だった(図28)。全国月平均価格は年間を通して300円/kg以上の高値で推移した(図29)。1~11月の全国のまき網による生鮮カツオの水揚量は13,179トンで、近年では2021年に次ぐ水揚量となった(図30)。全国月平均価格は319円~527円/kgの高値で推移した(図31)。

本年は南方からのカツオの来遊量が近年では比較的多かったようで、更に黒潮続流が東北沿岸を北上したことでカツオ漁場が沿岸寄りに形成され、好条件が重なり水揚量が伸びた。10月は気仙沼港に水揚げが集中したが、需要が堅調なため大きな値崩れとはならなかった。

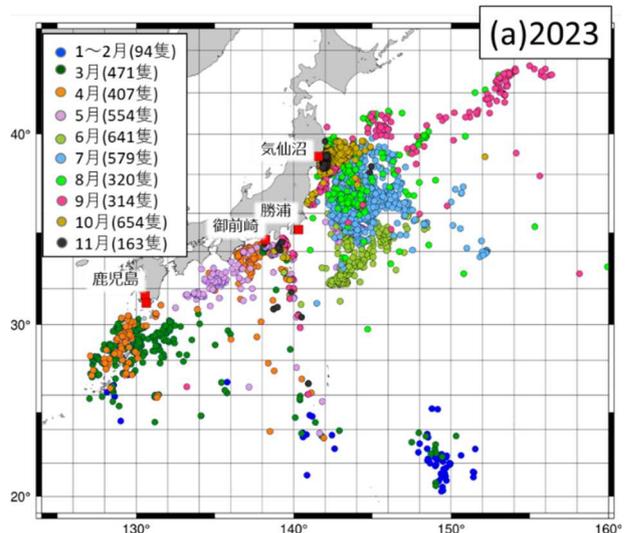


図27. 2023年の近海竿釣り船の漁場(情報収集海域全体)

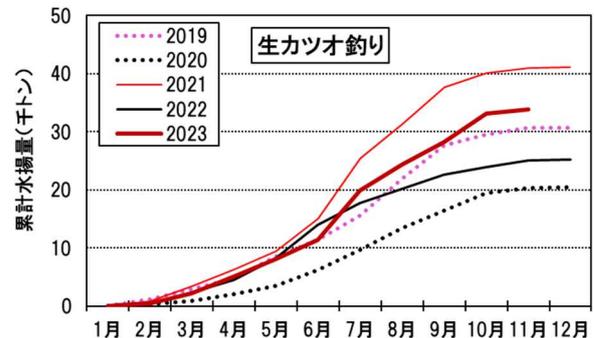


図28. 2019~2023年の全国主要港における生鮮カツオ(釣)の月別累計水揚量の推移

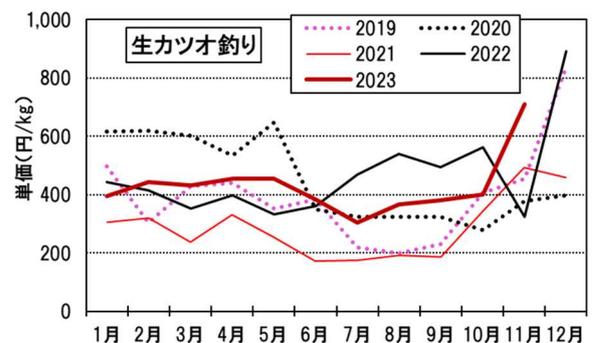


図29. 2019~2023年の全国主要港における生鮮カツオ(釣)の月別単価の推移

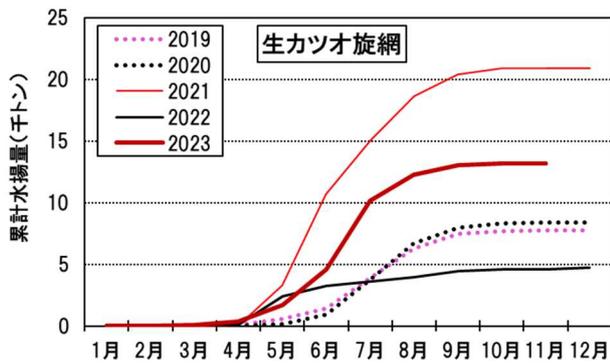


図 30. 2019～2023 年の全国主要港における生鮮カツオ(まき網)の月別累計水揚量の推移

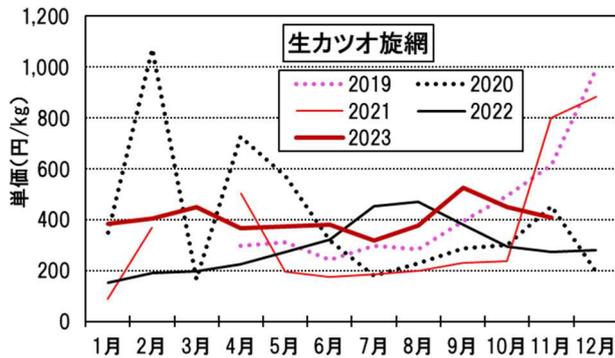


図 31. 2019～2023 年の全国主要港における生鮮カツオ(まき網)の月別単価の推移

● ビンナガ

今年の近海竿釣り船によるビンナガ漁は 5 月中旬から本格化し、近年では比較的安定して漁獲された。漁場は、5 月は房総～東北海域で、6 月は 5 月と同じ海域に加え、房総南東沖の広い範囲に形成され、7 月は常磐沖が主漁場となった(図 32)。いずれも黒潮続流が接岸して北上した流路の東側の操業が主体であったため、主要港である気仙沼港や勝浦港にも比較的近かったことが好条件となった。全国の生鮮ビンナガ(全漁法)の 1～11 月の水揚量は 22,131 トンで、不漁だった前年の 2 倍程度で、好漁だった 2020 年の 60%であった(図 33)。全国月平均価格は 399～865 円/kg の高値で推移した(図 34)。前年の不漁を受けて今年のビンナガ漁は不安視されていたが、春先の和歌山県のはえ縄による水揚量は好調で、初夏の竿釣りによるビンナガ漁に順調に繋がったとみられる。水揚量が多かったが、前年の不漁を補完するように需要もあったとみられ、大きく値崩れすることはなかった。

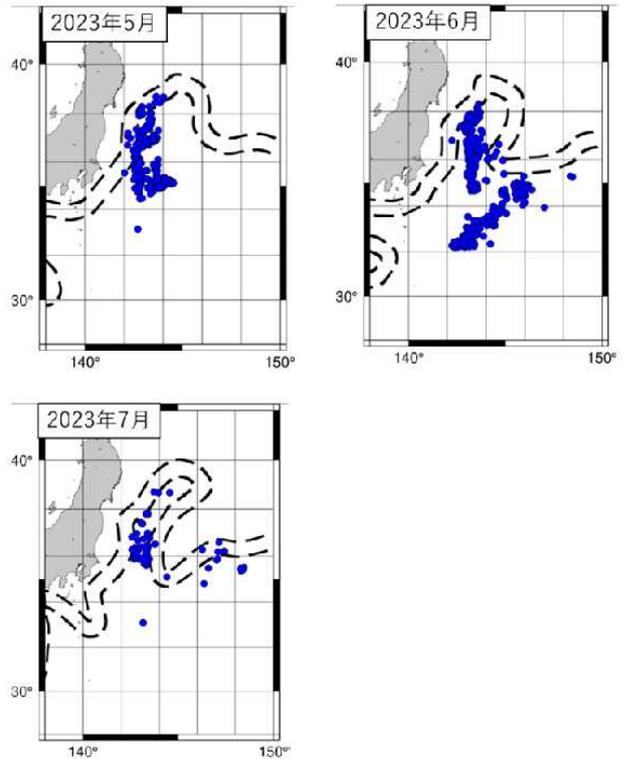


図 32. 2023 年 5～7 月の近海竿釣り船によるビンナガの漁場(青丸、JAFIC 聞き取り)と各月中旬の黒潮流路(黒点線、海上保安庁)

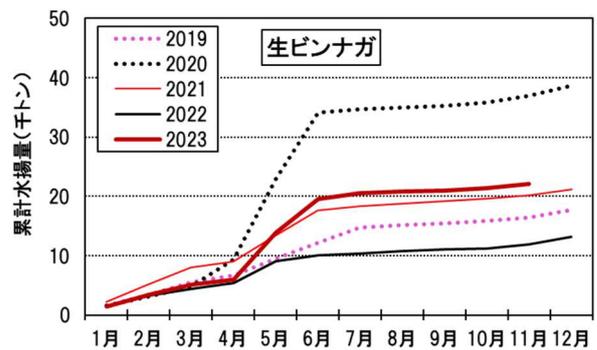


図 33. 2019～2023 年の全国主要港における生鮮ビンナガの月別累計水揚量の推移

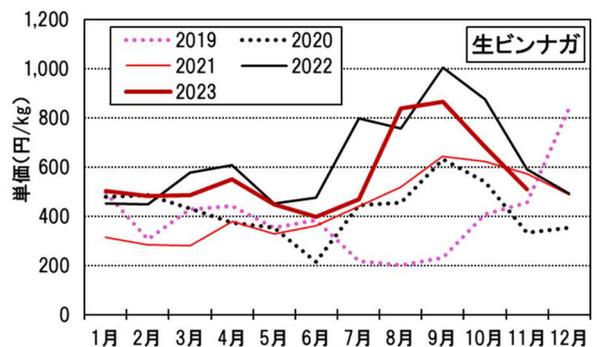


図 34. 2019～2023 年の全国主要港における生鮮ビンナガの月別単価の推移

(水産情報部 水野紫津葉)

(4)スルメイカ・アカイカ

1)生鮮スルメイカ

本年の全国主要港における生鮮スルメイカの水揚量は11月末現在で1.1万トンと、前年の1.5万トンを下回った。また、2019～2022年の平均(2.1万トン)の5割であった(図35)。この不漁の主な原因は、秋季発生系群と冬季発生系群の釣りによる漁場一斉調査(日本海は6～7月、太平洋は8～9月に実施)のCPUEが2023年は過去最低を示したように、両系群の資源量が前年より減少したためと考えられる。

海域別にみると、1～11月の累計水揚量は、三陸(底曳網主体)で前年比150%と上回り、青森太平洋側(昼釣り主体)は前年並み(96%)、他の海域は前年を下回り、北海道が54%、九州が56%、日本海が28%であった(図36)。三陸と青森太平洋側の水揚量が他海域よりも好調だった原因として、6～7月に三陸～道東沖で行われた表層トロール調査によるスルメイカのCPUEが今年は前年を上回ったことから漁場一斉調査の結果と異なり来遊量が比較的多かったことが考えられる。一方、日本海の不振は、資源量の減少に加え、対馬暖流が前年より強勢で、海面水温も前年より高かったことから、スルメイカの南下の遅れや漁場形成に影響した可能性がある。

本年の月別単価は前年の高値を維持し、11月には過去最高の1,154円/kgとなった(図37)。この原因として、いか類の加工原料不足が考えられる(次項アカイカを参照)。

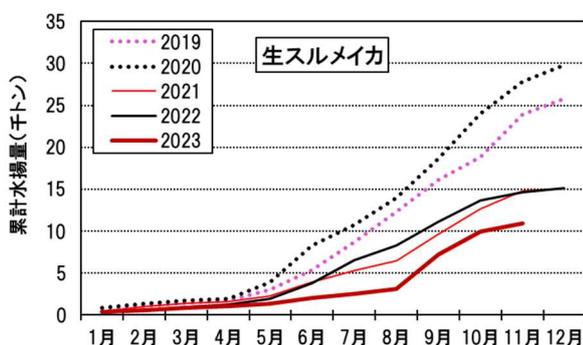


図35. 2019～2023年の全国主要港における生鮮スルメイカの月別累計水揚量の推移

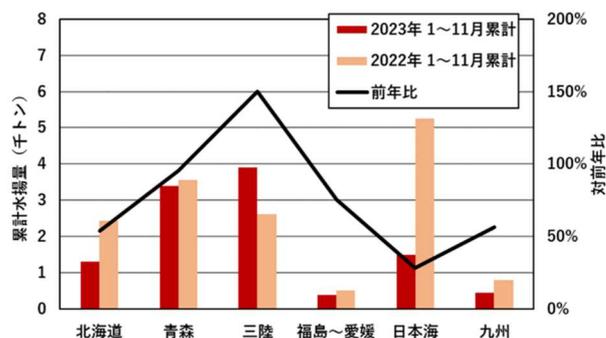


図36. 2022年と2023年の1～11月の生鮮スルメイカの海域別累計水揚量と前年比

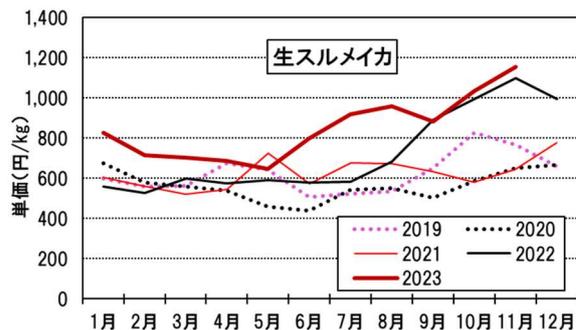


図37. 2019～2023年の全国主要港における生鮮スルメイカの月別単価の推移

2)冷凍スルメイカ

本年の全国主要港における水揚量は11月末現在で1.6千トンであり、2019～2022年の平均(5.8千トン)の1/4、前年(3.9千トン)の4割であった(図38)。この不漁の主な原因も資源量の低迷にあると考えられる。なお、中型いか釣り船(冷凍)の日本海のスルメイカ漁の漁期は5月～翌年の2月末である。不漁が長く続いたことや燃油高騰の影響を受け、出漁しても採算割れになることから、近年は、出漁を6月に遅らせ、終漁を12月前半とする船もみられ、漁期が短縮傾向にある。このことも水揚量の減少の要因となっている。

冷凍スルメイカの月別単価(図39)は、前年末の高騰を引き継ぐように1月から高値で推移し、9月は1,600円/kgを超え、11月には過去最高の1,871円/kgとなった。近年輸入が急増した中国産スルメイカも、今期の漁獲が不振で輸入が増える余地がないことから、相場を押し上げた。

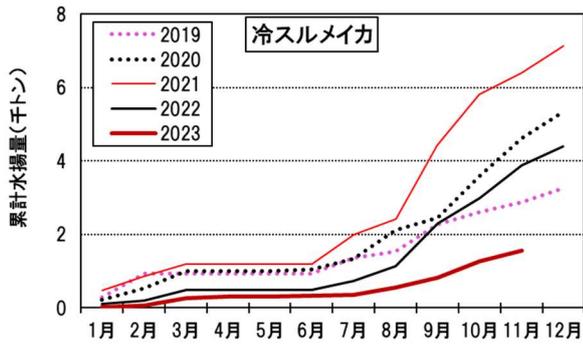


図 38. 2019～2023 年の全国主要港における冷凍スルメイカの月別累計水揚量の推移

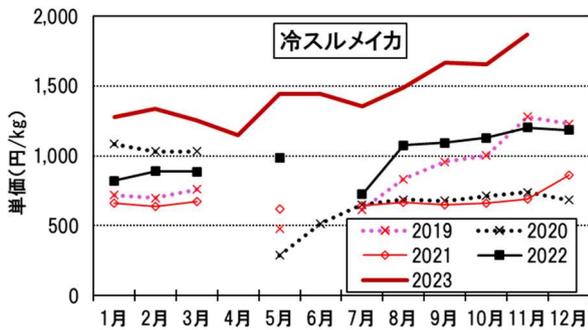


図 39. 2019～2023 年の全国主要港における冷凍スルメイカの月別単価の推移
(水産情報部 谷津明彦)

3) アカイカ

本年の冷凍アカイカの水揚は 11 月末で終了し、1～11 月の累計水揚量は 2,810 トンと、前年同期(2,832 トン)と同程度で(図 40)、過去 5 年間(2018～2022 年)平均の 55%であった。八戸主体の水揚であったが、函館にも 283 トンが水揚された。平均単価は 3 月に約 1,600 円/kg に高騰したが、7 月の夏漁以降は 900～1,000 円に落ち着いた(図 41)。

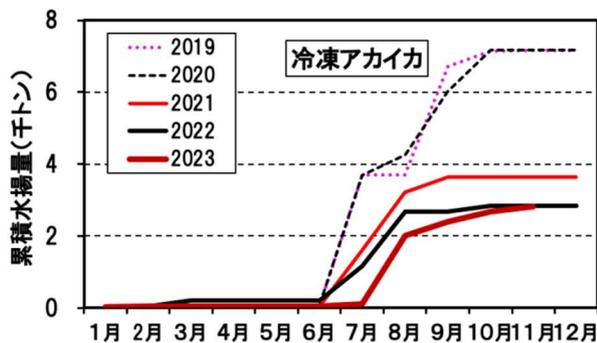


図 40. 冷凍アカイカの 2019～2023 年の累計水揚量(2023 年は 11 月まで)

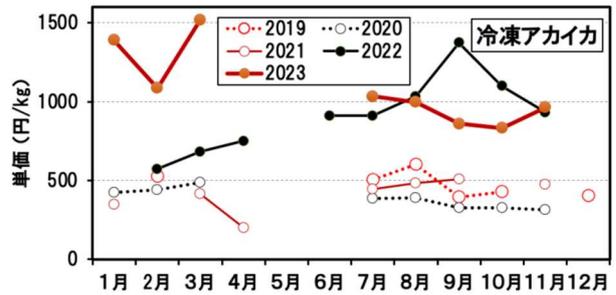


図 41. 冷凍アカイカの 2019～2023 年の月別単価の推移

本年 11 月末までの水揚量と平均単価との関係から計算される総水揚金額は 25 億円と推計され、前年や 2020 年と同程度で、比較的高い水準であった(図 42)。

北太平洋の主に西経海域で 5～8 月(夏漁)に操業する中型いか釣り船の出漁隻数は、2011 年の東日本大震災以降に大幅に減少したが、近年はスルメイカが不漁のためアカイカ漁へ出漁する隻数が徐々に増え本年は 25 隻となった(図 43)。また、前年の夏漁は 2 航海する船はほとんどなかったが、本年は日本海のスルメイカが不漁であることから 7 月下旬以降に 2 航海目を行う船が 10 隻前後にのぼった。中型いか釣り船は全て 9 月下旬でアカイカ漁を終え、大型いか釣り船による調査船 1 隻は 11 月まで東経海域で調査操業を続けた。

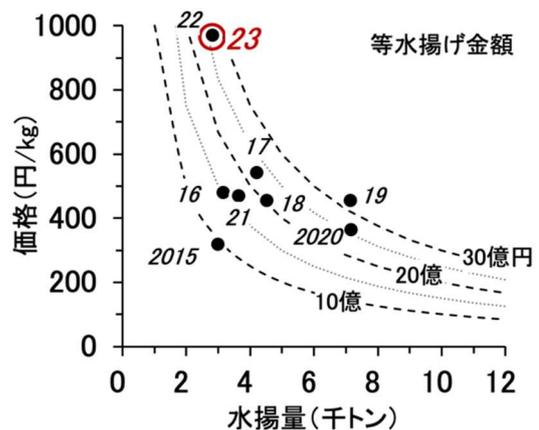


図 42. アカイカの 2015～2023 年の年別水揚量と価格(円/kg)の関係 破線は等水揚げ金額(2023 年は 11 月末まで)

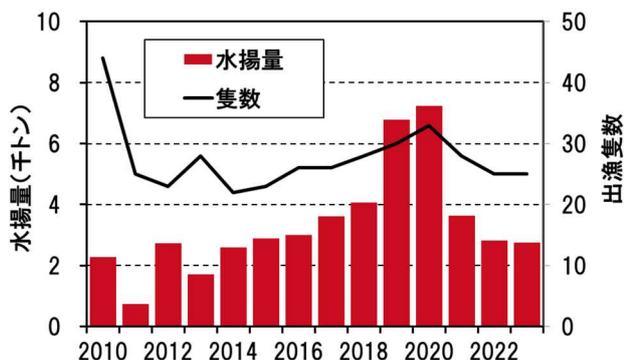


図 43. 北太平洋沖合におけるアカイカ夏漁(5~8月)の出漁隻数の推移(いか釣り調査用船1隻、大型いか釣り船1隻を含む)

近年、中国いか釣り船による北太平洋西経海域での操業隻数が増えており、前年は48隻が観測された。しかし、本年は15隻に減少した。この原因は不明であるが、後述するように西経海域のアカイカ資源水準の減少を反映したものかもしれない。

アカイカ夏漁の対象となる資源水準を表す1日1隻当たり漁獲量(CPUE: 胴肉ケース数/日・隻)は、直近の5年間で見ると2020年にピークとなり、その後本年まで徐々に減少する傾向が見られた(図44)。

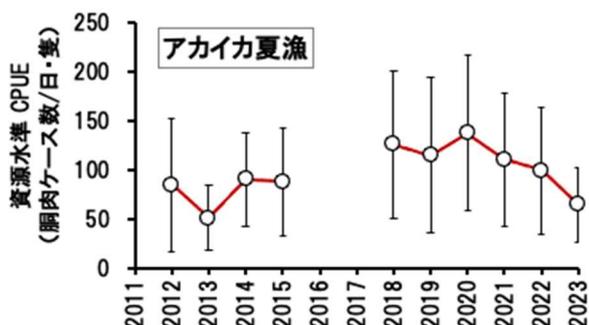


図 44. 北太平洋沖合におけるアカイカ夏漁(5~8月)の胴肉ケース数でみた資源水準(ケース数/日・隻)。2016年と2017年は欠損。

本年度のアカイカ夏漁の大きな特徴は、20年近くにわたり西経海域に形成されていた漁場が7月中旬以降に東経海域に移ったことである(東経177度前後)。このことは、西経海域の資源水準が低下する一方、これまで資源状態があまり良くなかった東経海域の資源が回復しつつあることが示唆しており、その背景として、本年発生した大型の

エル・ニーニョ現象が一時的に分布に影響を及ぼした可能性が考えられる。漁場の主たる緯度は2019年に最も南下して以来、北よりに形成される状態が続いており(図45)、近年の北太平洋における海洋熱波の影響によるものとみられる。

本年は国産スルメイカの記録的な不漁が続き、それに加えて国際的な原料であるアルゼンチンマツイカも不漁となり、いか類加工原料の供給不足が続いている。

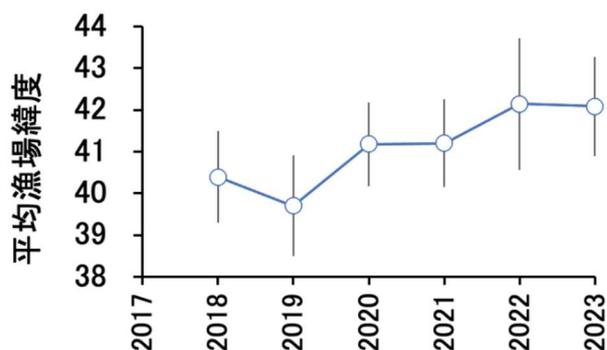


図 45. 北太平洋沖合におけるアカイカ夏漁(5~7月)の中型いか釣り船の漁場緯度の平均値(縦棒は標準偏差)

(海洋事業部 酒井光夫)